



公共施設における美術展示活動推進プロジェクト企画提案書

2001. 11

もくじ

p. 1	① Quake Center(クウェイク・センター)とはどのような組織か
	② 公共施設における美術展開催の提案(本企画の目的)
p. 2	③ 本企画展の実践内容
	④ 本企画の実践環境
p. 3	⑤ 実践に向けて
p. 4	展覧会場イメージ図(その1)
p. 5	展覧会場イメージ図(その2)
p. 6	展覧会場イメージ図(その3)
p. 7	出展予定作家・作品の一例
添付資料	Quake Center中心メンバーのプロフィール Quake Centerでの個人の自主研究発表の議事録

Quake Center(クウェイク・センター)とは？

●複雑化する現代美術の状況を横断型研究組織に所属する多彩なメンバーで再考察する

現代日本社会における美術表現を取り巻く環境は、他の学問やビジネスと同様、日々複雑さを増し、あらゆる困難と可能性を孕んでいます。そのような美術の状況に対し何らかの形で問題意識を持つ、東京大学大学院情報学環学際情報学府修士課程1年に所属する有志の学生が中心となり、2001年5月に発足、既存の美術様式の因習とは異なる形で社会における新たな表現のあり方を模索する研究会がクウェイク・センター（代表：小川希／坪井りん／坪井あや）です。

東京大学大学院情報学環学際情報学府は、「情報」をキーワードに、技術の体系だけでなく、人間の行動や意識、社会のさまざまなシステム、文化や芸術、産業や政治・国際関係など、人間社会のあらゆる側面から「情報」に関する、より総合的でより高度な教育研究の社会的意義の高まりを踏まえ、それに応えうるような教育研究体制の整備の喫緊な要求に応えるべく、平成12年4月から、学校教育法第66条に定める「研究科以外の教育研究上の基本となる組織」として、東京大学大学院に、「情報学環」及び「学際情報学府」として設置された研究機構です。ここでは、多数の分野横断的なプロジェクト研究を柱に据え、文系理系の区別を越えた情報分野の学融合を目指し、全学にわたる情報関連の諸領域から教官が集まり、また、学生も縦型の専門的な狭域の研究ではない、新しい学問におけるアプローチを模索しようという熱意を持って様々な分野から集まっています。クウェイク・センターはそこに所属する、美術大学出身の制作者をはじめ、社会学を専門とし、社会における美術の役割を考える者、また理科系の知のベースから美術の可能性を考える者など、あらゆる背景を持った学生が中心となって、現代日本社会における混迷した表現の姿を前に、「美術」をキーワードとしていけば必然的に発足した自主研究活動であるといえます。

現在の活動は週1回の定期的な研究発表を中心に展開しており、私たちの活動と社会とのつながり、接点をどのように確保してゆけるのかを模索している段階にあります。

公共施設における美術展開催の提案 (本企画の目的)

●クウェイク・センターの活動における発見と公共的企画実践の意義

クウェイク・センターでは、これまで半年間展開してきた活動の中で、以下のような発見に至りました。

- ①「現代美術」における制作・鑑賞の場は、限定された層に向けてしかその門戸が開放されていない。その原因は、展示方法などの現象的問題よりも、制作者／鑑賞者の意識的問題に深く根差している。
- ②この問題を解決しなくては、日本の情報化社会における美術は新たな流れを見ることも、活性化されることもない。

私たちはこのような発見を踏まえ、議論の場を重ねて、次のような企画を展開する意義を見出しました。

- (1)個人ギャラリーや美術館など、既存の美術展示の枠組みにおける作品発表に興味を持たないラディカルな作家層が、その作品を社会に向けて隠蔽しない発表の場の創設。
- (2)キュレーター、展示企画者による恣意的決定権の弱い（もしくは恣意的決定権が存在しない）作品発表の場を設ける。これは美術を「あるがまま」の姿に戻す試みであり、高度資本主義社会の（高尚な）一商品として美術が消費されていく姿に抵抗する試みである。
- (3)展示場所そのものを再考察し、美術と生活者の「シナリオのない」出会いの場を作り出す。

あらゆる筋書きによって演出された既存の美術展示の場から作品を解放すると共に、鑑賞者もまた、生活の一場面美術作品と出会うことで、純粋な形での両者のコミュニケーションを成立させる。

以上のような目的を持った企画を展開させることはもちろん、容易なことではなく、またクウェイク・センターがそういった場をオーガナイズするという時点で、完全にニュートラルな場所の創設は不可能だという反論も否めません。しかしながら、このような問題意識を根底に内持ち続ける組織によって新しい美術展示の場が現実に模索されてゆくことは、制作者／鑑賞者の域を超え、共同体に生きる公共生活者にとって大変意義のあることであると、私たちは考えています。この企画は東京という都市をはじめとした社会における美術活動の実践的な試みであり、それが完成形態でない限り、一過性のものにせず、定期的開催されていくことが必要になります。

また、クウェイク・センターが重心を置いている問題は、公共性の内にあり、この企画運営はあくまでも個人レベルではなく、私たちの問題意識に賛同していただける公共機関との共同作業でなければ、目的は達成されないところのものであります。

本企画展の実践内容

●出展者と金銭面での運営方法

今回の企画展は、クウェイク・センターの現代社会における美術の既存展示／鑑賞風景に対する疑問視に端を発していますので、出展者も既存の枠組みの中では作品発表の機会を（意図的／非意図的は問わず）与えられていない、私たちと同世代の若いアーティストを対象とします。

利潤の追求は目的とせず、出展者には展示場所を無償で提供し、来場者の入場料も無料とします。出展者はクウェイク・センターの基本理念への賛同のもと、作品制作費は自己負担とします。実際展示にかかる費用については、私たちの所属する学際組織の利点を十二分に活用し、あらゆる形で様々な人々に支援を呼びかけます。また、現段階において十分な金銭的支援を得ることが困難である場合、出展作家のカタログの販売およびに飲食物の販売によって展示費用の一部を賄うことも考えています。

展示環境についての提案は以下に記しますが、その具体的な形は私たちの憶測の外にあり、実践プログラムの場所の決定の後に然るべき形で綿密な詳細を模索し、追って提案させていただきますが、新しい時代の文化を担う若い世代のリアルな興味への訴求力を持ったプログラムを展開したいと考えています。

本企画の実践環境

●利用目的を終えた公共施設における展示の提案

クウェイク・センターでは、本企画の実践環境として、例えば廃校となった学校の体育館や閉鎖された住居、病院など、現在では本来の利用目的を終えた公共施設における展示を提案します。公共機関であることの必要性については前述の通りですが、本来の利用目的を持たず、いわば「宙に浮いた」状態の公共施設には、私たちが問題意識を抱く現代社会における美術のあり方と類似するところが多く、それらの施設と美術が共に公共性を取り戻す場として、本企画を展開する環境としては優れて適していると考えます。

全く利用されていない環境では、電気・水道系統、安全面など不可能も多いかと推しますので、その場合には再利用の考えられている（もしくは既に再利用されている）環境の一部を短期間解放していただくという形も考えられると思います。

いずれにせよ、公共機関からの理解と協力がいただければ、提示された環境においてクウェイク・センターの実質的な理念実践を最大限の努力と工夫のもとで行いたいと考えています。

実践に向けて

●開催希望予定場所

元道灌山中学校体育館

●開催希望予定期間

2002年3月の土曜、日曜、二日間

●予算案

収入金額

科目	内容	金額
団体負担		330,000
カタログ収益	1枚500円で100枚完売するとして	50,000
飲食物販売収益	喫茶代	50,000
計		430,000

支出金額

科目	内容	金額
通信費	電話代、FAX代	5,000
広報費	チラシ:1500部	30,000
会場費		50,000
会場設営費	パネル、平台、布など	200,000
	照明、プロジェクターなど	50,000
記録費	写真、ビデオなど	5,000
事務費	コピーペーパー代	10,000
運搬費	軽トラレンタル代	20,000
カタログ制作費	デザイン費	30,000
	CD-R:100枚	30,000
計		430,000

●出品予定作家

東京芸術大学卒業の若手作家7名、武蔵野美術大学卒業の若手作家6名、慶応大学大学院生1名
東京大学大学院生3名、他数名

●告知・宣伝計画

基本的な宣伝形態としては、各種雑誌媒体上での告知、チラシの配布、ポスターの掲示になると考えられます。また、電子媒体を積極的に活用していくことも考えており、美術系のwebサイトおよびイベント情報系のwebサイト上での告知、美術系メーリングリストでの告知を予定しています。

2ヶ月前の時点で、本企画の意図、内容、出展者、出展作品の詳細を記したプレスリリースを作成し、各種媒体へ送付します。

チラシとポスターは1ヶ月前から配布・掲示する予定です。

美術好きのみならず幅広い世代の人に来てもらいたいと考えていますので、対象となる雑誌媒体、チラシ、ポスターの配布場所もそれを反映したものにする予定です。

雑誌媒体では、美術雑誌（「美術手帳」など）、情報誌（「ぴあ」「Tokyo Walker」）、生活スタイルマガジン（「」）等を考えています。

チラシの配布先およびポスターの掲示先は都内のギャラリー、画廊などの他にも、大学（美術大学、その他の大学をとわず）、音楽ショップや、飲食店、店舗など、幅広くおかせて頂けるようお願いしていきたいと思っております。とりわけ開催場所の周辺には、重点的に告知していきたいと考えています。

また、プロジェクト用のWebサイトを立ち上げ、そこから随時情報を発信していくことも予定しています。

添付資料

Quake Center中心メンバーのプロフィール
及び
Quake Centerでの個人の自主研究発表の議事録